松山市文化財調査報告書 203

浮穴保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

南高井一丁地遺跡

２０２１

公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団

埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

浮穴保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

南高井一丁地遺跡

2021

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序　　言

本書は、令和元年度に松山市南高井町で浮穴保育園新築工事に伴い実施した南高井一丁地遺跡の発掘調査報告書です。

本遺跡が所在する南高井町は松山平野南部の重信川両岸に広がっており、西は松山市森松町、東側は東温市南野田と接しています。遺跡は重信川右岸の微高地上にあり、西に隣接する「浮穴小学校構内遺跡」では昭和 49 年から平成元年までの 4 次にわたる調査で、弥生時代の土器棺墓や古墳時代の竪穴建物跡などが見つかり、周辺には弥生時代の墓域や古墳時代の集落が広がっていることを示しました。

今回の調査は、浮穴保育園新築に伴うもので、この地域では数十年ぶりの調査になります。調査の結果、主に弥生時代後期から古墳時代初頭の土器や石器類が出土しましたが、遺構の検出は見られなかったことから、「浮穴小学校構内遺跡」の縁辺部に位置する遺跡であると考えられます。

今回の調査成果が松山市南部の歴史や文化の解明の一助になれば幸いです。

令和 3 年 12 月 24 日

公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

例　　言

1．本書は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが令和２年２月から同年３月に実施した、松山市南高井町 1609 番１の一部における浮穴保育園新築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本報告書掲載の遺構は、呼称名を略号化して記述した。
土坑：SK、小穴・柱穴：SP

3．本書で使用した標高値は海抜標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした方眼北で、世界測地系に準拠している。

4．基準点測量及び水準測量は、セントラルエンジニアリング株式会社に業務を委託した。

5．本書掲載の基本土層や遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』（2006 年版）に準拠した。

6．本書掲載の遺構図等は作田一耕の指示のもと、山邊進也及び現場作業員が担当し、遺物の復元・実測・トレース・遺構図のトレース作業は作田の指示のもと、和泉順子、木下奈緒美、重松希依、寺尾いずみ、松本美代子が行った。

7．発掘調査時の遺構写真は作田が撮影し、遺物写真の撮影・図版作成は大西朋子が行った。

8．本書の執筆は作田が担当し、浄書・版組み・編集・校正は作田、木下、寺尾が行った。

9．本書で使用した遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

10．報告書抄録は、巻末に記載している。

本 文 目 次

第 1 章　はじめに…… 1
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　調査・整理・刊行組織…… 2

第 2 章　遺跡の立地及び環境…… 3
第１節　地理・地質的環境…… 3
第２節　歴史的環境…… 3

第 3 章　調査の経過と成果…… 6
第１節　調査の経過及び方法…… 6
第２節　層　位…… 6
第３節　遺構と遺物…… 9

第 4 章　調査の成果…… 22

挿図目次

第2章　遺跡の立地及び環境

第 1 図　周辺遺跡分布図 …… 4
第 2 図　調査区位置図 …… 5

第3章　調査の経過と成果

第 3 図　調査区土層図 …… 7
第 4 図　遺構配置図 …… 8
第 5 図　SK001 測量図 …… 9
第 6 図　SK002 測量図
第 7 図　SK003・004 測量図 …… 10
第 8 図　SK005 測量図 …… 11
第 9 図　SP007 測量図
第 10 図　SP008 測量図 …… 12
第 11 図　SP009 測量図
第 12 図　SP010 測量図
第 13 図　SP011・012 測量図…… 13
第 14 図　SP013 測量図
第 15 図　SP014 測量図 …… 13
第 16 図　SP015 測量図 …… 14
第 17 図　SP016 測量図
第 18 図　SP017 測量図
第 19 図　SP018 測量図 …… 15
第 20 図　SP019 測量図
第 21 図　SP020 測量図
第 22 図　SP021 測量図
第 23 図　SP022 測量図 …… 16
第 24 図　その他の出土遺物実測図（1）…… 17
第 25 図　その他の出土遺物実測図（2）…… 18

表目次

第3章　調査の経過と成果

表 1　土坑一覧 …… 19
表 2　柱穴一覧
表 3　その他の出土遺物観察表（土製品）…… 20
表 4　その他の出土遺物観察表（石製品）…… 21

写真図版目次

図版 1　1. 調査区完掘全景（西より）
　　2. 調査区完掘全景（俯瞰）
図版 2　1. 調査区東壁土層断面全景（西より）
　　2. 調査区東壁土層断面 11 層北側立ち上がり（西より）
　　3. 調査区東壁土層断面 11 層南側立ち上がり（西より）
図版 3　1. 調査区北側土層断面全景（南西より）
　　2. 調査区北側土層断面 11 層北東側立ち上がり（南より）
　　3. 調査区西壁土層断面全景（東より）
図版 4　1. 調査区西壁土層断面北西部 11 層掘り下げ付近（東より）
　　2. 調査区南壁土層断面東端（北より）
　　3. 調査区南壁土層断面礫層東端検出状況（北より）

図版　5　1. 調査区南壁土層断面礫層（北より）
2. 調査区南壁土層断面西端検出状況（北より）
3. 調査区北東部 11 層検出状況（南東より）
図版　6　1. SK001 完掘（南より）　2. SK002 完掘（南より）
3. SK003・004、SP008 完掘（南より）　4. SK005、SP019 完掘（北西より）
5. SP009 完掘（西より）　6. SP011・012 上層断面（西より）
7. SP021 完掘（西より）　8. SP022 完掘（北より）
図版　7　1. 調査区北西部遺物出土状況（東より）　2. 調査区北西部遺物出土状況（西より）
3. 調査区北西部遺物出土状況（南より）　4. 調査区北西部遺物出土状況（北より）
5. 調査区北西部遺物出土状況（北東より）　6. 調査区北西部遺物出土状況（北より）
7. 調査区北西部遺物出土状況（東より）　8. 調査区東壁際遺物出土状況（西より）
図版　8　1. 北トレンチ石庖丁出土状況（南より）　2. 石庖丁出土状況（西より）
3. 調査風景（西より）　4. 遺構掘削状況（南より）
5. 調査区北西部 11 層掘削状況（東より）　6. 調査区北西部 11 層掘削状況（南西より）
7. 調査区上層断面測量状況（西より）　8. 遺構測量状況（西より）
図版　9　1. 出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

今回報告する南高井一丁地遺跡の調査は、松山市が行う浮穴保育園新築工事に伴って、埋蔵文化財の発掘調査として実施したものである。

2019（令和元）年 12 月 5 日、松山市長 野志克仁（以下、申請者という。）から、松山市南高井町 1608 番 1 、1609 番 1（以下、申請地という。）における埋蔵文化財の確認申込書が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。

申請地は、松山市埋蔵文化財包蔵地『№134　浮穴小学校遺物包含地』内に所在する。周辺には埋蔵文化財包蔵地名にもなっている「浮穴小学校構内遺跡」がある。この遺跡からは弥生時代後期から古墳時代初頭の壺棺を主体部とする土器棺墓や溝のほか、古墳時代中期の竪穴建物跡などが見つかっている。また、平成 28 年度に行った申請地北側の試掘調査では、弥生時代後期の竪穴建物跡や集石遺構が見つかっているものの、本格調査が行われたのは「浮穴小学校構内遺跡」のみで、周辺の実態はあまり分かっていない。

試掘調査は 2019（令和元）年 12 月 19 日及び 20 日に行った。試掘トレンチを 7 本設定し、遺構・遺物の確認作業を行った。その結果、申請地の大半で遺物を包含する土層の広がりを認めることができた。ただし、申請地北東部では、他の地点と比べて土色や土質に違いのあることも分かった。

今回の調査範囲内に設定したトレンチでは、遺物包含層（極暗褐色粘質土）直下の土層（褐色粘質土）検出面で柱穴を確認した。この遺物包含層と遺構検出面の組み合わせは申請地南部に設定したトレンチでも確認している。このことから、少なくともその範囲に遺跡が広がっている可能性のあることが想定できる。

出土遺物は弥生土器を中心に、須恵器も出土している。

試掘調査結果から、申請地東部の柱穴を検出したトレンチ周囲に遺跡の存在する可能性が高いと判断し、160㎡を調査対象とすることとした。

それを受け、申請者と公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）との間で発掘調査に関する協議が行われ、2020（令和 2）年 1 月 23 日に南高井一丁地遺跡埋蔵文化財調査に係る委託契約を締結した。

遺跡名等調査に関する詳細は以下のとおりである。

調査名　：　南高井一丁地遺跡
調査場所：　松山市南高井町 1609 番 1 の一部
調査期間：　2020（令和 2）年 2 月 13 日（木）～ 2020（令和 2）年 3 月 13 日（金）
調査面積：　160㎡
調査担当：　作田　一耕

第２節　調査・整理・刊行組織

発掘調査は令和元年度に実施した。調査報告書の刊行については令和３年度に埋文センターと申請者の間で整理業務委託契約を締結した。内容は遺構図・遺物・写真の整理・報告書の本文執筆・編集・印刷及び発送に関する委託契約を締結した。なお、発掘調査及び整理作業は、以下の体制で実施した。

〔平成 31・令和元年度　調査組織〕（平成 31 年４月１日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	本田　元広
事務局	局　長	片山　雅央
	次　長	大野　昌孝
施設管理部	部　長	片上　俊哉
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	梅木　謙一
	専門嘱託職員	作田　一耕（調査担当）

〔令和３年度　整理・刊行組織〕（令和３年４月１日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	本田　元広
事務局	局　長	片山　雅央
	次　長	杉野　公典
施設管理部	部　長	杉野　公典
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	梅木　謙一
	専門嘱託職員	作田　一耕（整理担当）

第２章　遺跡の立地及び環境

第１節　地理・地質的環境

本遺跡が立地する松山平野南部は、平野最大の流域を誇る重信川によって分断され、左岸は四国山地が迫っていることもあり狭隘な平地が横たわっている。この平地は重信川と四国山地を源流とする砥部川、久谷川によって形成された扇状地、砂礫台地が山麓に広がり、重信川沿いは氾濫原となっている。右岸は高縄山地に源を発する重信川に加え、小野川、悪社川、内川などによる連続する扇状地が高縄山地南麓に連なり、扇端部から南の重信川との間は氾濫原が東西方向に向かって広がっている。

表層地質で見ると、氾濫原は主に礫・砂・シルト・粘土等の沖積低地堆積物で、四国山地、高縄山地の山麓部分は礫を主体とする扇状地堆積物や段丘堆積物で成り立っている。

本遺跡がある地点は地形的には重信川右岸の氾濫原で、地質的には沖積低地堆積物の範囲内にある。周辺には古墳や城館跡などが点在するが、遺跡の密集度合いは他の地区に比べると非常に低い。試掘等でもあまり確認されておらず、遺跡の少ない地区と言える。その理由が沖積低地の氾濫原であるためという可能性はあるが、もう少し細かな地理環境を検討していきたい。というのは、同様の立地を見せる下流域の居相地区や石井地区には、広範に遺跡の分布が認められるからである。これについては本遺跡の北側を西流する内川の存在が影響している可能性も考慮する必要があろう。

それは、暴れ川であった重信川を河口から現久谷大橋近辺まで、足立重信の改修、付け替え工事によって鎮めたとの記録があり、その範囲内を見ると、小野川を呑んだ石手川の他、内川、砥部川、久谷川が含まれる。重信川右岸は悪社川を合わせた内川を南限に、北の小野川、堀越川から高縄山南麓に各時代、各種の遺跡が密集している。この点からも内川が松山平野南東部において集落、墳墓などを選地するにあたっての一つの基線になっていたと判断できよう。

第２節　歴史的環境

次に周辺の歴史的環境を概観する。上記した松山平野南東部の遺跡の立地環境とも重なる部分が多いが、重信川右岸の内川下流域では本遺跡の東に「波賀部神社古墳」西に「白山神社古墳」があり、共に前方後円墳である。「波賀部神社古墳」は５世紀末に築かれた全長 62m の古墳で内川右岸で悪社川との合流地点付近にある。「白山神社古墳」は内川左岸にあり、現在の重信川河川敷に面している。

悪社川を遡ると前方後円墳である「播磨塚天神山古墳」を代表とする播磨塚古墳群が松山市と東温市境にある。現在は「播磨塚天神山古墳」と横穴式石室の一部が残っている古墳のみであるが、他にも数十基の古墳があり、それらは過去の開墾や自衛隊の駐屯地建設などで消滅したと言われている。

転じて、小野川、堀越川から高縄山南麓付近を見ると「星岡西山古墳」を含め「二つ塚古墳」「タンチ山古墳」「鶴塚古墳」上流の「葉佐池古墳」などの前方後円墳「五郎兵衛谷古墳」「素鵞神社古墳」といった円墳も多く分布している。他にも「素鵞神社古墳」の東方に５世紀代に築かれたとされる「観音山古墳」があり前方後円墳とも円墳とも言われているが、未調査のため正確な墳形は不明である。

さらに本遺跡北西の石井・越智・居相町周辺には、縄文時代から近世にかけての各時代各種の遺構、遺物が見つかっており、その一部を以下に記す。

A 南高井一丁地遺跡

1 浮穴小学校構内遺跡
2 白山神社古墳
3 土居城跡
4 北土居墳墓
5 越智一丁目遺跡
6 今在家遺跡
7 中ノ子廃寺遺物包含地
8 波賀部神社古墳
9 高井城跡
10 南窪田遺跡
11 久米官衙遺跡群
12 鷹ノ子遺跡
13 タンチ山古墳
14 久米窪田遺跡
15 北窪田遺跡
16 星ノ岡古墳群
17 星ノ岡城跡
18 北久米遺跡
19 二つ塚古墳
20 南久米町遺跡
21 素鷲神社古墳

第１図　周辺遺跡分布図

西石井荒神堂遺跡：弥生時代後期から古墳時代初頭の壺棺墓、土坑墓や竪穴建物跡を検出。

石井東小学校構内遺跡：弥生時代前期の土器棺墓、同時代終末から古墳時代初頭の竪穴建物跡群を検出した。古墳周溝内から6世紀後半の須恵器器台や大型甕も出土。

石井幼稚園遺跡：弥生時代後期の貯蔵穴、古墳時代中期の竪穴建物跡、古代から中世にかけての掘立柱建物跡や多量の遺物が出土した溝を検出。

南中学校構内遺跡：弥生時代前期の遺物の他、古墳時代中期の竪穴建物跡や掘立柱建物跡を検出。

越智遺跡：弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が出土。

井門Ⅰ遺跡：弥生時代後期末の遺物が大量に出土。

井門Ⅱ遺跡：縄文時代後期の遺物や古墳時代中期と幕末から明治の遺構、遺物が出土。

北井門遺跡：縄文時代の遺物を含む河道や包含層、弥生時代後期末から古墳時代前期前半にかけての竪穴建物跡や前方後方墳、中世の掘立柱建物跡や溝等多くの遺構、遺物を検出。

今在家遺跡：古墳時代初頭の竪穴建物跡等を検出。

この一帯の調査成果で気付くのは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の集落遺跡が広範囲に展開していることである。松山平野では大きく見ると臨海部の遺跡である宮前川北斎院遺跡や山麓・山間部の遺跡である東温市の揚り畑遺跡のほぼ中間にあり、内陸部の大規模な集落の存在がうかがえる地区である。そして弥生時代後期後半から古墳時代への土器型式の変化も臨海部の宮前川北斎院遺跡ほど劇的ではなく、緩やかな変化を読み取ることができる。

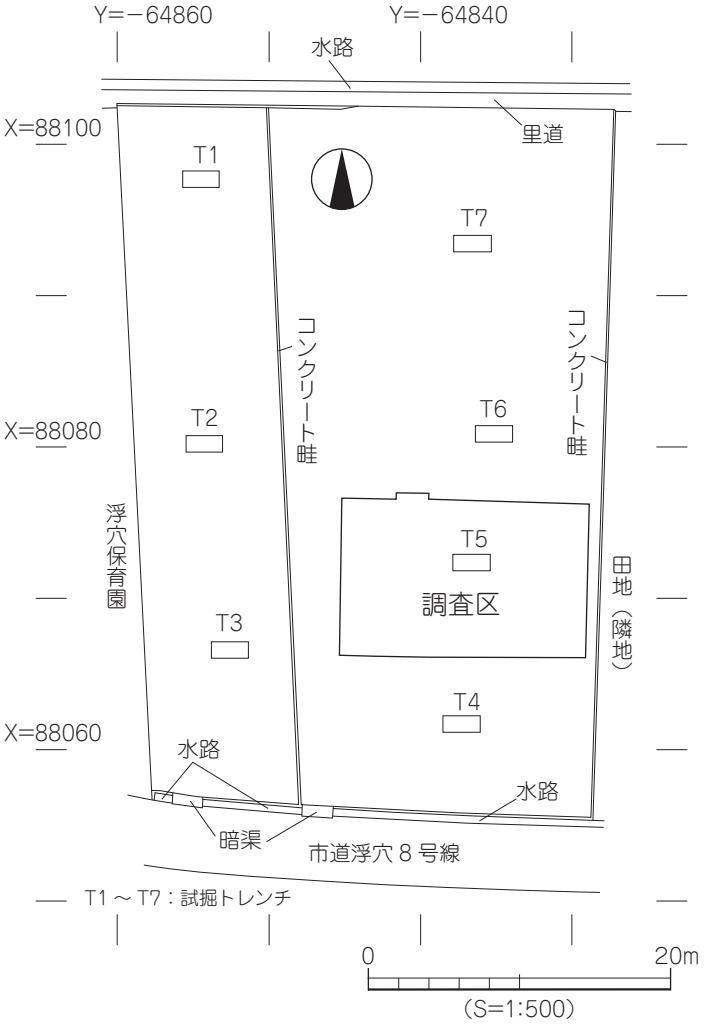
本遺跡の北約1kmの地点には、弥生時代から白鳳時代の遺跡が散在する。

中ノ子Ⅰ遺跡：弥生時代後期後半の竪穴建物跡や土坑、古墳時代後期の掘立柱建物跡等を検出。

開遺跡：古墳時代中期末から後期にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡等を検出。

中ノ子廃寺：7世紀中葉から後半に創建。

このように見てくると、前述したように内川と重信川の間には、時代にかかわらず遺跡の展開が希薄で、その中で「浮穴小学校構内遺跡」の存在は稀有である。勿論、今後発見される可能性もあるが、それは本遺跡同様、重信川や内川の氾濫などの影響が少ない場所に限られるであろう。



第２図　調査区位置図

第３章　調査の経過と成果

第１節　調査の経過及び方法

1　調査の経過

第１章に記したとおり、発掘調査は令和２年２月13日（木）～同年３月13日（金）まで行った。当初、申請地の範囲は水田として利用されていたが、調査を行ったのはそのうち、中央東寄り付近である。

この地点を選定した理由は、試掘調査においてトレンチ内から唯一遺構（柱穴）を検出し、周囲に遺跡の存在が想定できたことによる。この試掘トレンチを中心に、ほぼ正位で東西16ｍ、南北10ｍの範囲を設定して調査に着手した。

2　調査の方法

表土は重機を使用して遺構検出面直上まで掘削した。その後人力で遺構検出作業を行い、遺構検出状況写真の撮影と遺構配置の概略図を作成した。その際、遺構には種別にかかわりなく順番に番号を振り、後で種別を付すという方法を取った。これはその後の作業の中で、遺構の性格の変更を余儀なくされた時に、種別も番号も振り直すという煩雑さや間違いを極力避けるためである。

調査を進めるにあたり、当該地が低地にあることから、湧水や雨水の排水も兼ねて調査区周縁部にトレンチを掘削し、それを利用して遺構検出面より下の土層も観察することとした。

第２節　層　位

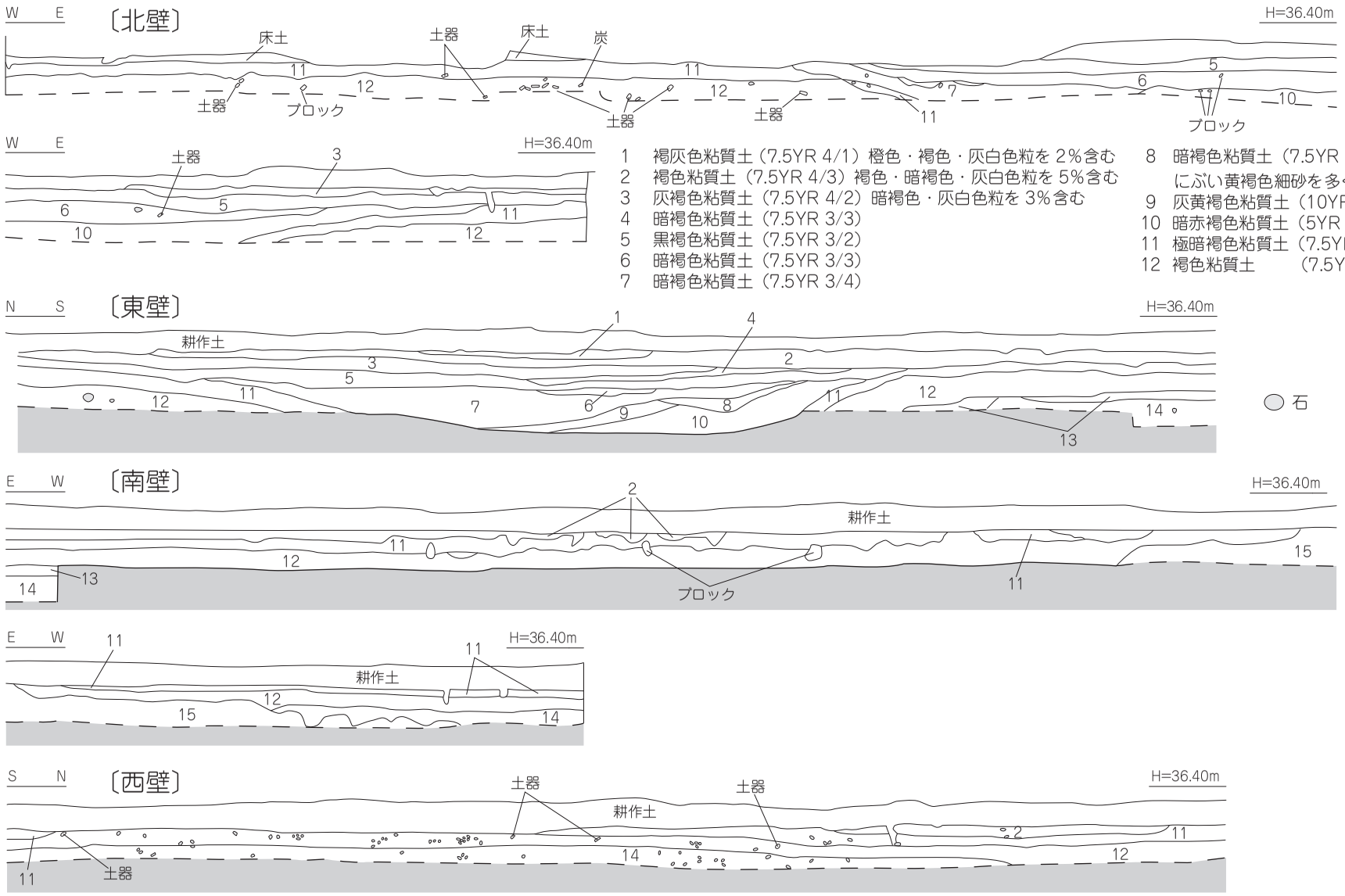
本遺跡は水田耕作地ということもあり、表土から遺構検出面までの層厚は約30㎝前後である。

基本的な層位は水田耕作土と床土の下に無遺物層、遺物包含層、遺構検出面が続く。

基本層位のうち全面に共通するのは、水田耕作土、床土及び１～５層の水平堆積土であり、その下部に試掘で遺物包含層とした11層（極暗褐色粘質土）、遺構検出面である12層（褐色粘質土）がある。11層は北壁と東壁で落ち込みを確認し、この中に堆積しているのが６～10層である。12層の下部には粘性土である13～14層がある。その他、調査区南西部には礫層（15層）の露頭が見られ、東西と北方向に潜り込んでいるのが確認できる。

上述のように調査区東壁では幅4.0～4.5mの溝状落ち込みである遺物包含層（11層）を確認したが、当初掘削したトレンチでは掘削深度が浅く肩部を確認したのみであったことから、調査完了後トレンチを拡張して11層全体を検出する補足調査を行った。その結果、断面は皿状で、その中には滞水性の粘質土が堆積しており、流水の痕跡はない。ただし、検出面では南東から北西方向に帯状に延びていることから、この性格を解決するにはさらに広い範囲の調査が必要となろう。

試掘調査で遺構検出面とした12層は遺物を相当量含む包含層でもあり、さらに下層にも遺構検出面のあることがうかがえる。このことから調査区北西隅の東西6.0m × 3.0mの範囲で12層下面まで



1　褐灰色粘質土（7.5YR 4/1）橙色・褐色・灰白色粒を 2％含む
2　褐色粘質土（7.5YR 4/3）褐色・暗褐色・灰白色粒を 5％含む
3　灰褐色粘質土（7.5YR 4/2）暗褐色・灰白色粒を 3％含む
4　暗褐色粘質土（7.5YR 3/3）
5　黒褐色粘質土（7.5YR 3/2）
6　暗褐色粘質土（7.5YR 3/3）
7　暗褐色粘質土（7.5YR 3/4）
8　暗褐色粘質土（7.5YR 3/4）
　　にぶい黄褐色細砂を多く含む
9　灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）
10　暗赤褐色粘質土（5YR 3/3）
11　極暗褐色粘質土（7.5YR 2/3）
12　褐色粘質土　　（7.5YR 4/3）

0　1　2m
（S=1:50）

第３図　調査区土層図

掘り下げを行ったが、遺構を検出することはできなかった。

なお、表土掘削は12層上面まで行い、12層が分布しない調査区南西部の礫層の露頭部などは、12層検出面とほぼフラットになるように掘削深度を整えたことから、遺構配置図中の等高線は省略した。

調査にあたり、調査地内を5m四方の方眼グリッドに分けた。グリッドは北から南へA・B・C…西から東へ1・2・3…とした。

第4図　遺構配置図

第３節　遺構と遺物

本調査では土坑５基、小穴16口を検出した。遺構番号は遺構種別に関係なく、001・002…と付しており、本書ではこの番号を使用する。調査区内で遺構が検出できたのは、中央部から南部にかけてで、遺構配置図のトーンで示した11層で挟まれた地点からは遺構が検出されていない。これは上述したように、この部分の形成に関わっているためであろう。

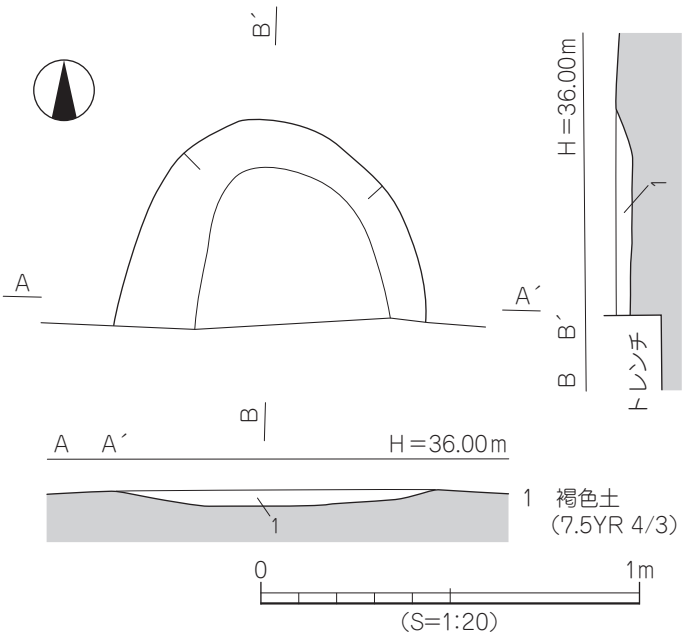
１　土坑

５基の土坑を検出したが、全て残存状態は決して良くないうえに出土遺物も少ないため、遺構の性格は不明である。

(1) SK001（第５図、図版６）

調査区南東端のＣ－４グリッドに位置し、北半分のみの検出である。そのため全容は不明であるが、平面は円形又は楕円形と推測できる。断面部の径0.82m、中央部の深さ0.04mを測る。埋土は褐色土（7.5YR 4/3）である。土師器の細片以外、図示できる遺物は出土していない。

時期：時期を特定できる遺物が出土していないため、不明である。

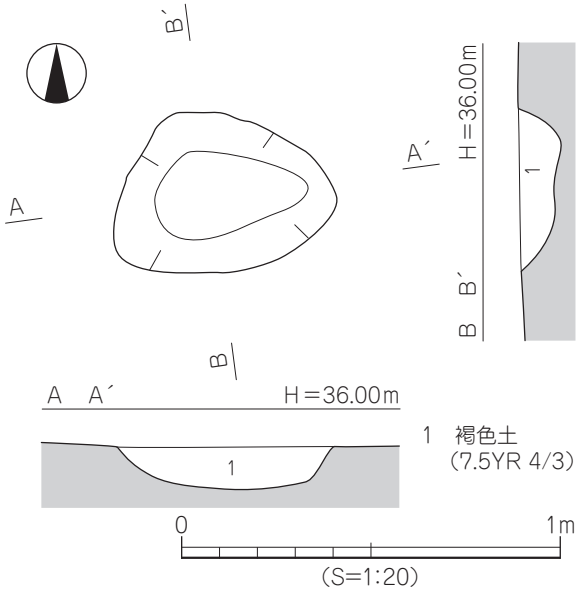


第５図　SK001 測量図

(2) SK002（第６図、図版６）

Ｃ－４グリッドに位置し、平面は不整楕円形である。断面部の長径0.57m、短径0.43m、中央部の深さ0.11mを測る。埋土は褐色土（7.5YR 4/3）である。遺物は出土していない。

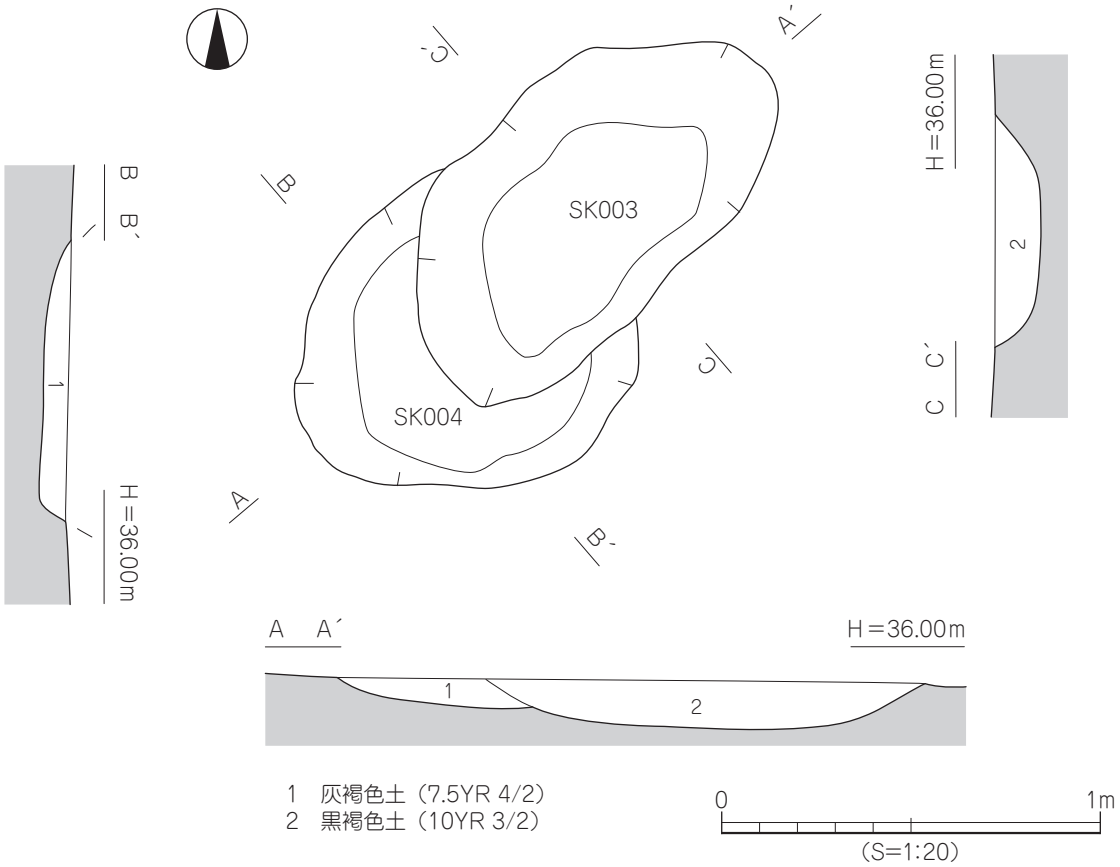
時期：遺物が出土していないため不明である。



第６図　SK002 測量図

(3) SK003（第７図、図版６）

Ｃ－４グリッドに位置し、平面は不整楕円形である。SK004と切り合い関係にあり、本遺構が新しい。断面部の



第７図　SK003・004 測量図

長径 1.17m、短径 0.62m、中央部の深さ 0.14m を測る。埋土は黒褐色土（10YR 3/2）である。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺物が出土しているが、細～小片のみで、図示できるものはない。

時期：出土遺物から、概ね古墳時代初頭と判断した。

(4) SK004（第７図、図版６）

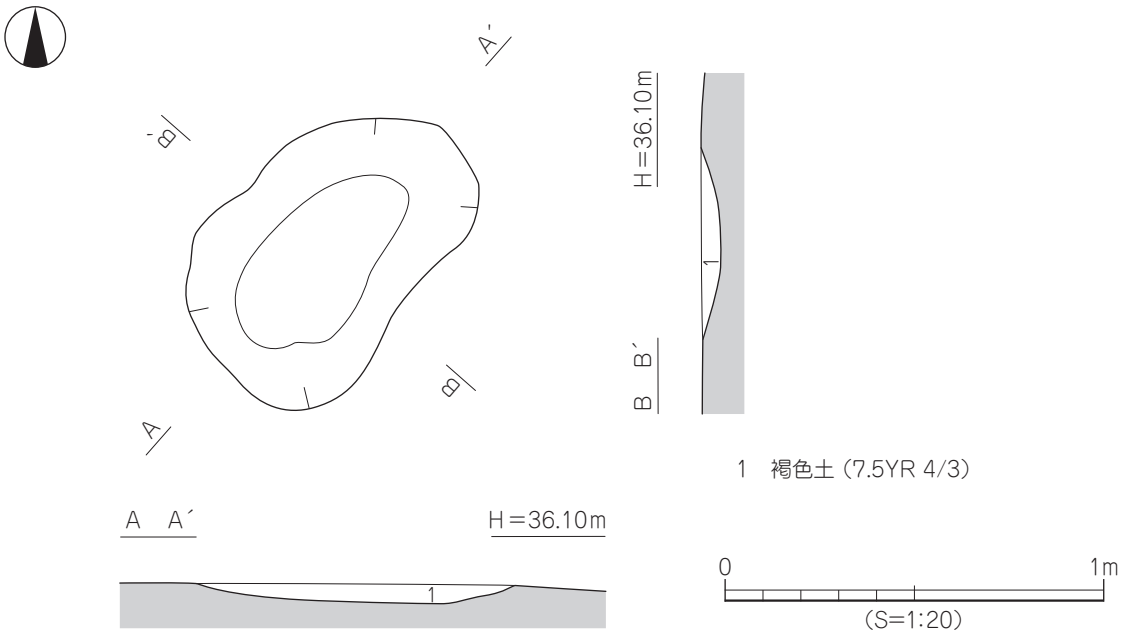
Ｃ－３・４グリッドに位置し、SK003 に切られている。このため全容は不明であるが、平面は不整形と推測できる。断面部の径 0.83m、深さ 0.08m を測る。埋土は灰褐色土（7.5YR 4/2）である。出土遺物は SK003 とほぼ同じである。

時期：SK003 よりは古いものの、概ね古墳時代初頭と判断した。

(5) SK005（第８図、図版６）

Ｂ－２グリッドに位置し、平面は不整楕円形である。断面部の長径 0.84m、短径 0.58m、中央部の深さ 0.06m を測る。埋土は褐色土（7.5YR 4/3）である。出土遺物は土師器片のみである。

時期：小片ではあるが、出土遺物から古墳時代初頭と判断した。



第８図　SK005 測量図

2　小穴

16 口の小穴を検出したが、掘立柱建物跡や柵列として捉えることのできるものはなく、調査区中央から南部に散在している状態である。

そのため、本項では各小穴を個別に説明する。

（1）SP007（第９図）

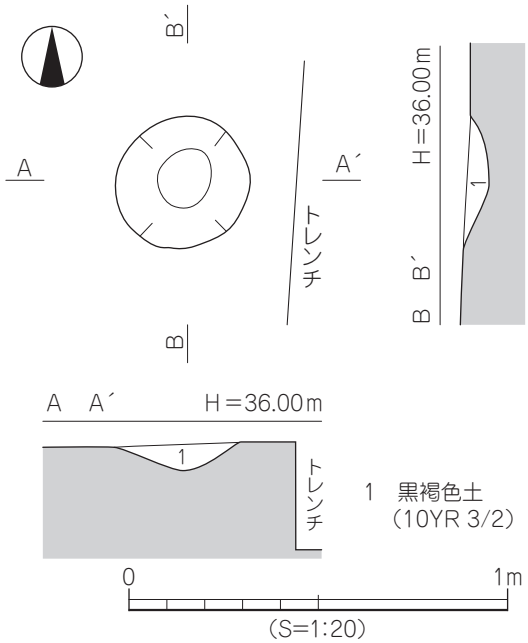
Ｃ－５グリッドに位置し、平面は円形である。断面部の径 0.38m、中部の深さ 0.08m を測る。埋土は黒褐色土（10YR 3/2）である。弥生土器片が出土しているが、小片のため図示はできない。

時期：出土遺物から弥生時代後期と判断した。

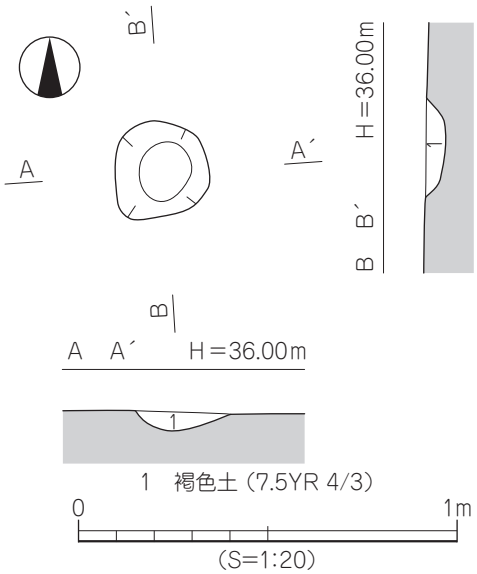
（2）SP008（第 10 図、図版 6）

Ｃ－４グリッドに位置し、平面は円形である。断面部の径 0.28m、中央部の深さ 0.05m を測る。埋土は褐色土（7.5YR 4/3）である。遺物は出土していない。

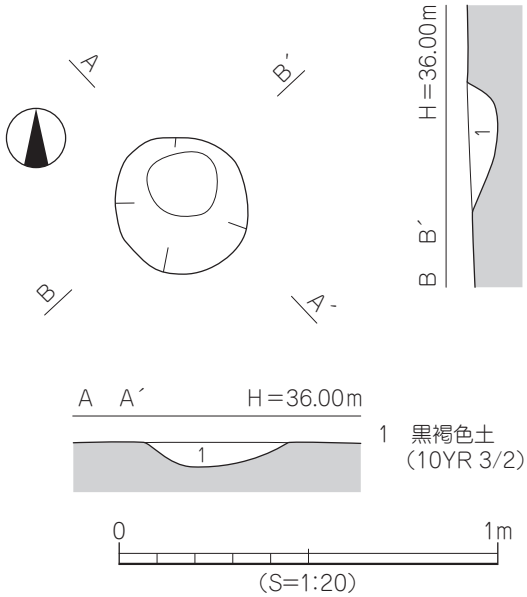
時期：不明である。



第９図　SP007 測量図



第 10 図　SP008 測量図



第 11 図　SP009 測量図

(3) SP009（第 11 図、図版 6）

B － 4 グリッドに位置し、平面は円形である。断面部の径 0.35m、中央部の深さ 0.07m を測る。埋土は黒褐色土（10YR 3/2）である。遺物は出土していない。

時期：不明である。

(4) SP010（第 12 図）

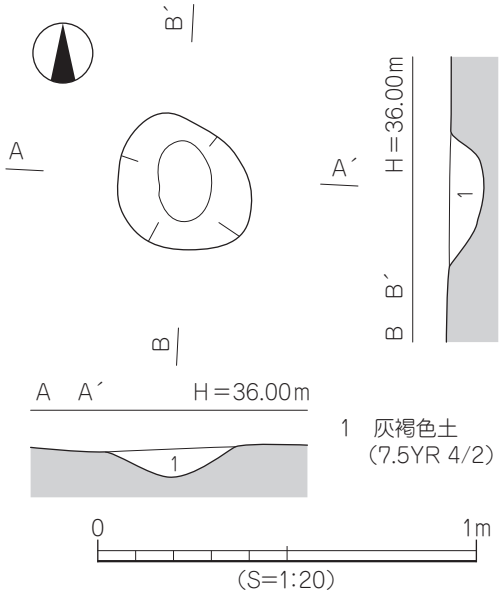
B・C － 3・4 グリッドに位置し、平面は円形である。断面部の径 0.39m、中央部の深さ 0.08m を測る。埋土は灰褐色土（7.5YR 4/2）である。遺物は出土していない。

時期：不明である。

(5) SP011（第 13 図、図版 6）

C － 3 グリッドに位置している。SP012 を切っており、平面は不整形である。断面部の長径 0.42m、短径 0.30m、中央部の深さ 0.17m を測る。埋土は黒褐色土（10YR 3/2）である。遺物は出土していない。

時期：不明である。



第 12 図　SP010 測量図

(6) SP012（第 13 図、図版 6）

C － 3 グリッドに位置している。SP011 に切られており、全容は不明であるが、平面は円形と推測できる。断面部の径 0.39m、中央部の深さ 0.14m を測る。埋土は 1 層が黒褐色土（7.5YR 3/2）、2 層

は褐色土（7.5YR 4/3）である。遺物は弥生土器片が出土している。

時期：出土遺物から弥生時代との推定はできるが、詳細な時期は不明である。

(7) SP013（第 14 図）

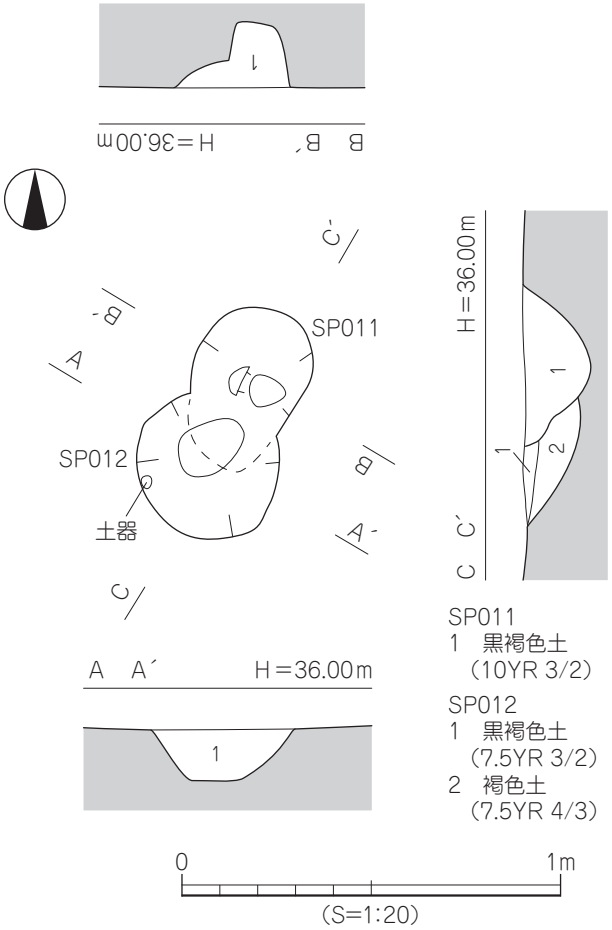
B・C－3グリッドに位置し、平面は楕円形である。断面部の長径 0.64m、短径 0.50m、中央部の深さ 0.11m を測る。埋土は灰褐色土（7.5YR 4/2）である。遺物は弥生土器片が出土している。

時期：出土遺物から弥生時代後期と判断した。

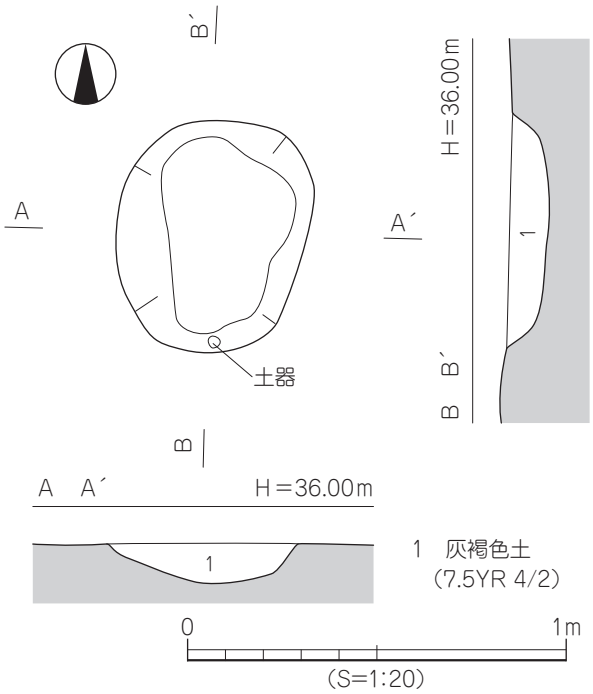
(8) SP014（第 15 図）

C－3グリッドに位置し、平面は円形である。断面部の径 0.23m、中央部の深さ 0.04m を測る。埋土は灰褐色土（7.5YR 4/2）である。遺物は出土していない。

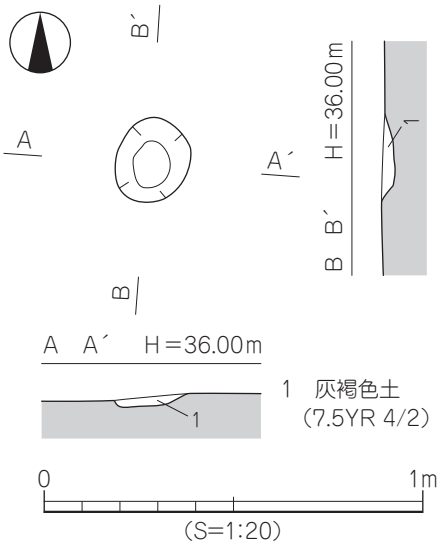
時期：不明である。



第 13 図　SP011・012 測量図



第 14 図　SP013 測量図



第 15 図　SP014 測量図

(9) SP015（第 16 図）

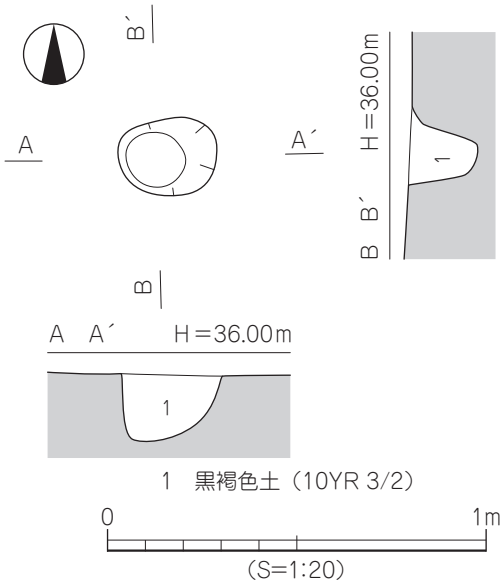
C－3グリッドに位置し、平面は楕円形である。断面部の長径 0.26m、短径 0.19m、中央部の深さ 0.18m を測る。埋土は黒褐色土（10YR 3/2）である。遺物は出土していない。

時期：不明である。

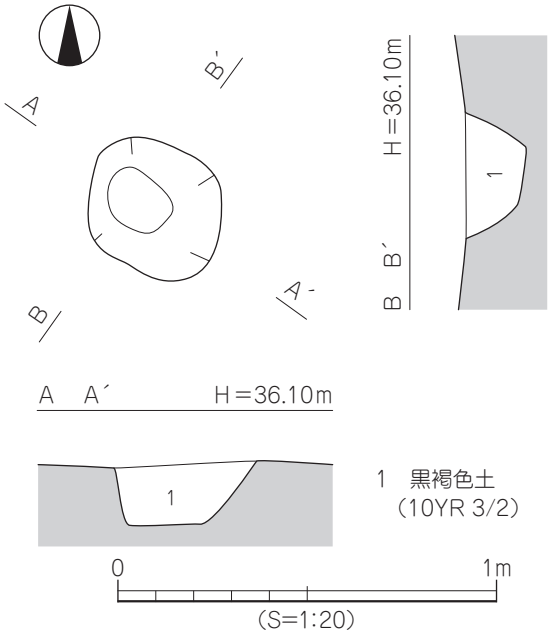
(10) SP016（第 17 図）

C－3グリッドに位置し、礫層露頭部に接している。平面は円形である。断面部の径 0.40m、中央部の深さ 0.17m を測る。埋土は黒褐色土（10YR 3/2）である。遺物は出土していない。

時期：不明である。



第 16 図　SP015 測量図



第 17 図　SP016 測量図

(11) SP017（第 18 図）

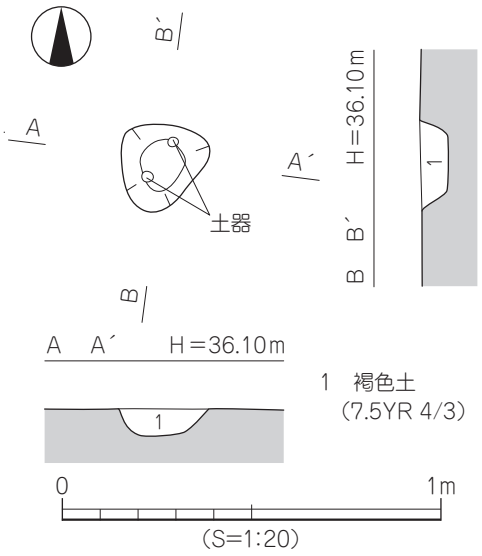
B－2グリッドに位置し、平面は不整円形である。断面部の径 0.24m、中央部の深さ 0.07m を測る。埋土は褐色土（7.5YR 4/3）である。遺物は弥生土器片が出土している。

時期：出土遺物から弥生時代後期と判断した。

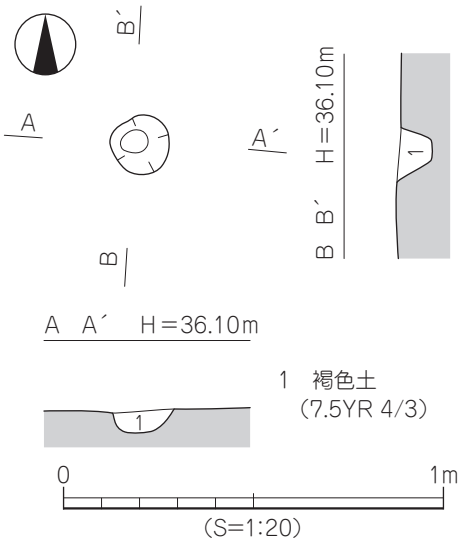
(12) SP018（第 19 図）

B－2グリッドに位置し、平面は円形である。断面部の径 0.16m、中央部の深さ 0.09m を測る。埋土は褐色土（7.5YR 4/3）である。遺物は出土していない。

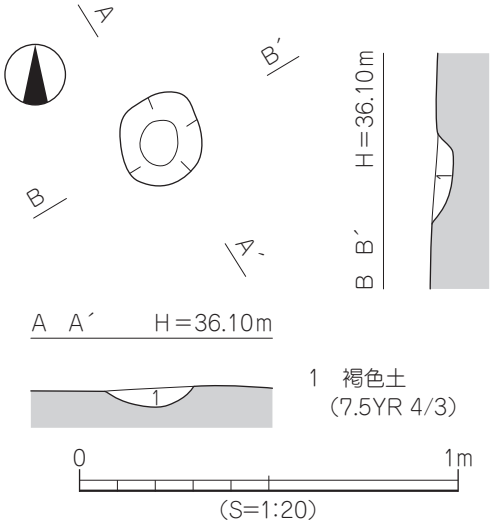
時期：不明である。



第 18 図　SP017 測量図



第 19 図　SP018 測量図



第 20 図　SP019 測量図

（13）SP019（第 20 図、図版 6）

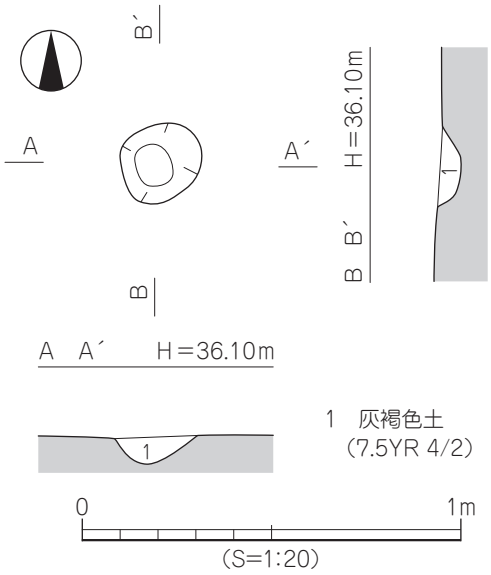
Ｂ－２グリッドに位置し、平面は円形である。断面部の径 0.25m、中央部の深さ 0.05m を測る。埋土は褐色土（7.5YR 4/3）である。遺物は弥生土器の細片が出土している。

時期：出土遺物から弥生時代の遺構と推測できる。

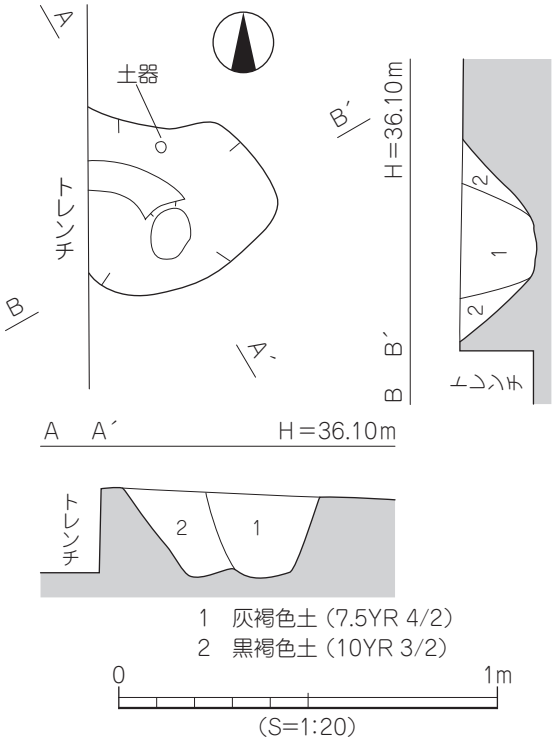
（14）SP020（第 21 図）

Ｂ－２グリッドに位置し、平面は円形である。断面部の径 0.23m、中央部の深さ 0.08m を測る。埋土は灰褐色土（7.5YR 4/2）である。遺物は出土していない。

時期：不明である。



第 21 図　SP020 測量図



第 22 図　SP021 測量図

（15）SP021（第 22 図、図版 6）

Ｃ－１・２グリッドに位置する。調査区南西隅にあって、東半分のみの検出である。そのため全容は不明で、平面は不整形である。断面部の径 0.56m、中央部の深さ 0.20m を測る。埋土は１層が灰褐色土（7.5YR 4/2）、２層は黒褐色土（10YR 3/2）である。

遺物は弥生土器片が出土している。

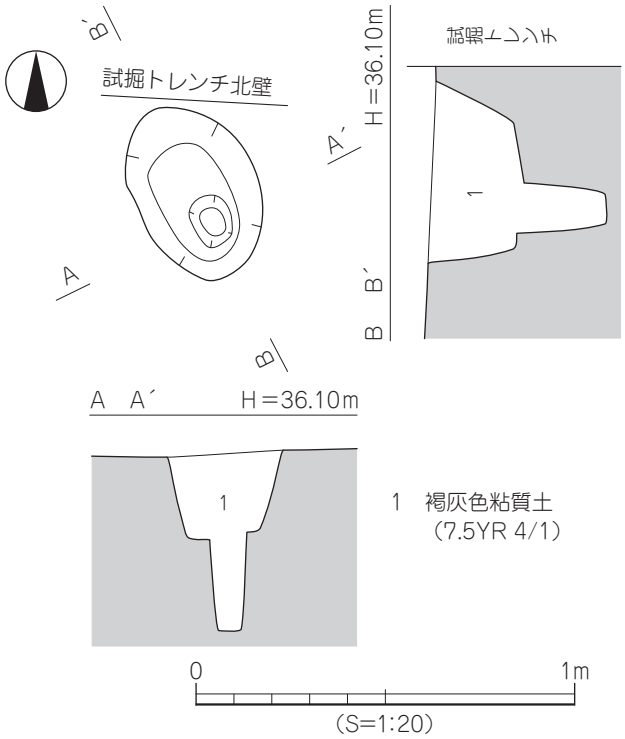
時期：出土遺物から弥生時代後期の遺構と判断した。

（16）SP022（第 23 図、図版 6）

Ｂ－３グリッドに位置し、平面は楕円形である。断面部の長径 0.48m、短径 0.32m、中央部の深さ 0.51m を測る。本遺構は試掘調査の際に確認したもので、今回の本調査で再検出し掘削し直したところ、南寄りの小穴底部から径 0.12m、深さ 0.24m の柱痕状の掘り込みを確認した。この遺構に関しては柱穴の可能性があるが、対応する柱穴が存在しないことから、他の小穴と同じ扱いとした。試掘時に記録した埋土は褐灰色粘質土（7.5YR 4/1）である。

遺物は 11 層（試掘時の層位では「4 層」）中より弥生土器片が出土している。

時期：遺構内からの遺物出土がないため、不明である。



第 23 図　SP022 測量図

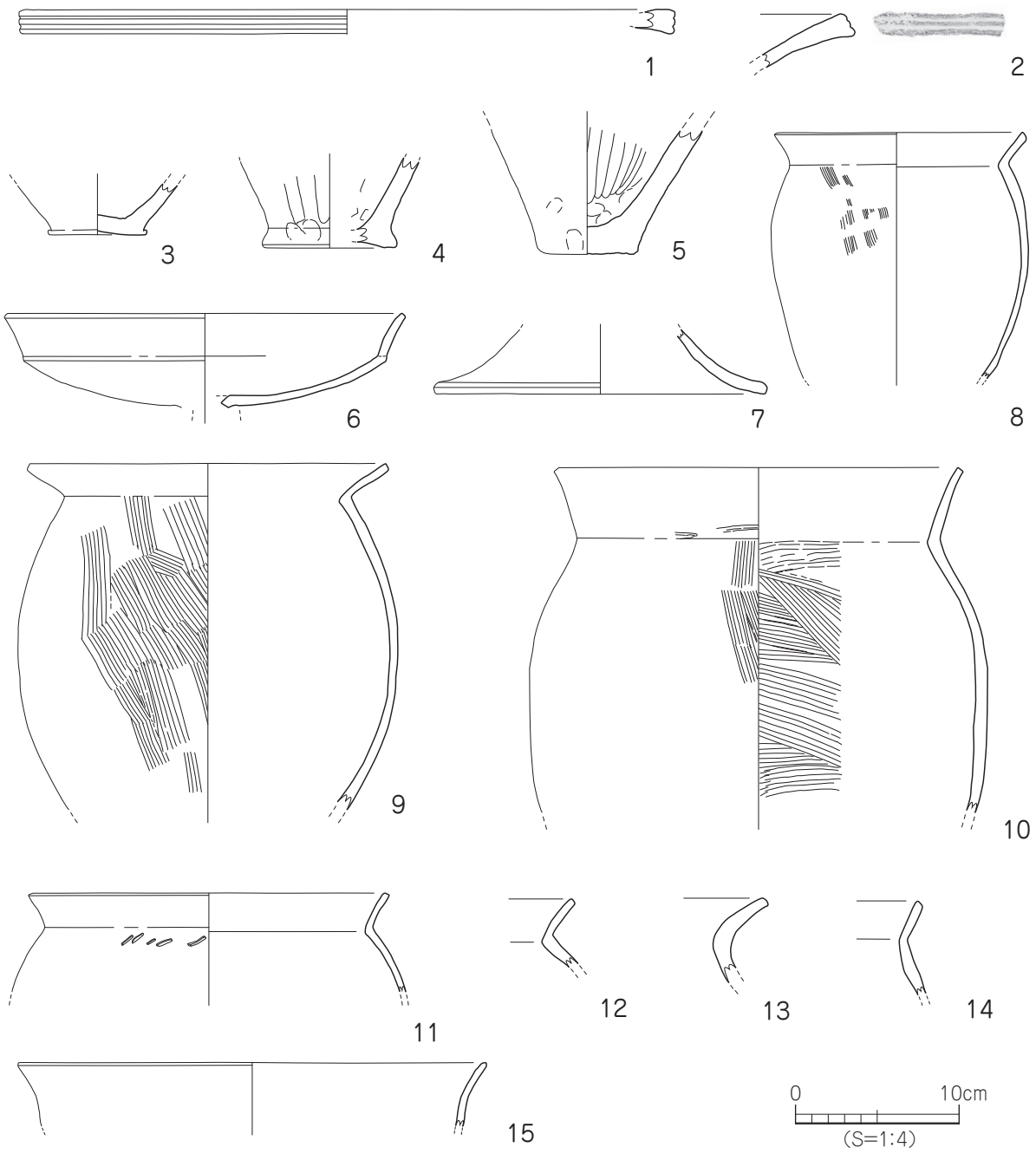
3　その他の出土遺物（第 24・25 図、図版 9）

遺構出土の掲示できる遺物がないため、ここでは調査区北西部の東西約 6.0m、南北約 3.5m の範囲で掘り下げを行った 11 層（遺物包含層）から 12 層（遺構検出面である地山相当層）の出土遺物と、調査区東壁際の 11・12 層境界付近及び調査区南西部の礫層（15 層）中から出土したものを掲載する。

調査区北西部の 11・12 層出土遺物の中には出土層位の曖昧なものが多いので、ここでは帰属を特定しないで説明を行っていく。この範囲の掘り下げの契機は、11 層の除去作業中にタタキ整形を施した甕（図 25 － 16）がほぼ 1 個体出土したことによる。これをもって、11 層掘削後、12 層上面で慎重に遺構検出を行い、支障のない範囲でさらに掘り下げを行ったものである。

調査区北西部出土の遺物は 1 ～ 17 である。1・2 は壺である。2 点とも口縁部片で、大きく開き端部に面を持つ。端面は 1 がほぼ垂直、2 は傾斜し、それぞれ 2 条の擬凹線が廻る。3 は壺の底部である。

周縁は小さく張り出し、外面中央部がわずかに凹面を持つ平底である。体部は外傾して立ち上がる。4・5は甕の底部である。4の周縁は張り出し、底面は上げ底になっている。5は平底である。2点とも体部は外傾して立ち上がる。6・7は高坏である。6は坏部片で、皿状の下半部に外反して立ち上がる口縁部が付く。脚部との接合部分は、剥離した状態が確認できる。7は脚裾部片で、大きく外反して座る。8～17は甕である。8・9は頸部が「く」字で、口縁部は短く外傾して立ち上がる。体部は長胴で最大径が8は上位、9は中位にあり、外面はハケ調整である。10も長胴の甕で、頸部は「く」字に屈曲し、口縁部は外傾して立ち上がるが、8・9に比べ長く伸び、立ち上がり角度も大きい。内外面ともハケ

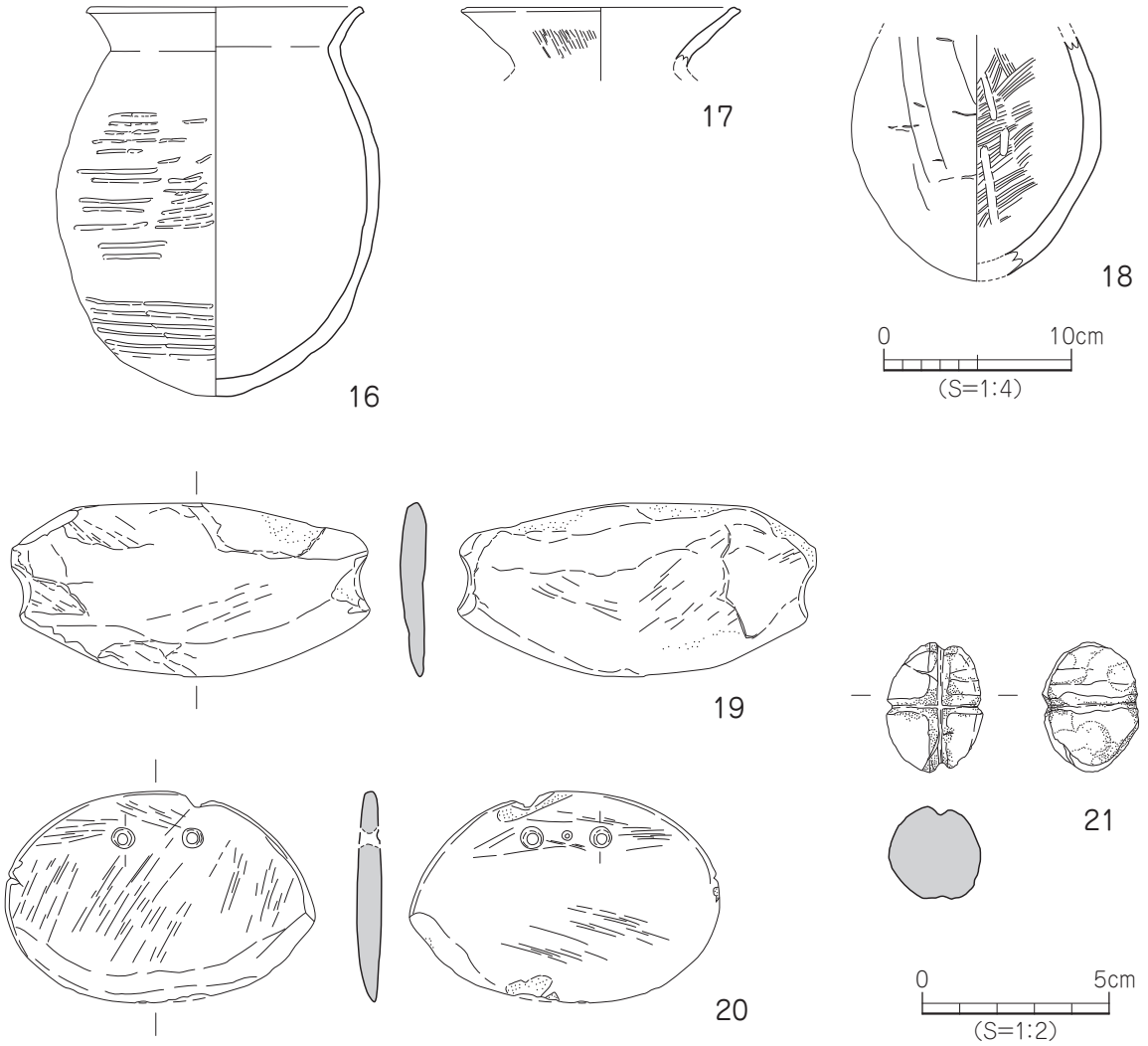


第24図　その他の出土遺物実測図（1）

調整である。11 ～ 14 は甕の口頸部片である。頸部が緩やかに湾曲する 13 以外は「く」字に屈曲し、8･9 に近い口頸部である。15 は 10 に類似した口縁部である。16 はタタキ整形の甕で、口縁部形状は 14 に近く、底部は丸底化している。体部外面は概ね横方向のタタキで、内面はナデ調整である。17 は甕の口縁部である。立ち上がりの形状等から、球胴化した体部を持つ甕の可能性がある。そのように仮定すると、今回出土した甕の中では最も新しいものとなる。以上が調査区北西部から出土したもので、1 ～ 7 は弥生時代後期前半、8 ～ 15 は弥生時代後期後半、16･17 はそれらに後出するものである。18 は調査区東壁際 11 層下端から 12 層上面の出土である。底部の丸底化が進んでいるが、器壁が厚く、在地の保守性を色濃く残していると捉えることもできる。

石器のうち、石包丁 19・20 は調査区北西部掘り下げ地点の東側近接地からの出土である。19 は 12 層から出土し、打製で両端を打ち欠いてある。石質は結晶片岩製。20 は 11 層から出土し、全面丁寧に磨きを施した磨製石包丁で木の葉形をしている。峰部寄りに 2 口の穿孔がある他、その中間には未貫通の穿ちかけた穴がある。石質は結晶片岩製。

21 は砂礫層である 15 層出土の有溝石錘で、砂岩製の球形の体部に十文字に溝が廻るものである。共伴遺物がないため、時期は不明であるが、上記の土器類が出土した 11･12 層に先行するものである。



第 25 図　その他の出土遺物実測図（2）

遺構一覧・遺物観察表　　－ 凡例 －

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（1）遺構一覧表

地区欄　　グリッド名を記載。

規模欄　　（　）：現存値を示す。

出土遺物欄　遺物名称を略記した。例）弥→弥生土器、土→土師器

（2）遺物観察表

法量欄　　[　]：復元値、（　）：残存値

胎土欄　　胎土中の混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 4）→「1 ～ 4㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄　　焼成欄の略記について

◎→良好、○→良

表 1　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地　区	平面形	断面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備考
001	C－4	円形 or 楕円形	レンズ状	0.82 ×（0.53）× 0.04	褐色土（7.5YR 4/3）	土	調査区南壁に接する
002	C－4	不整楕円形	レンズ状	0.57 × 0.43 × 0.11	褐色土（7.5YR 4/3）	—	
003	C－4	不整楕円形	レンズ状	1.17 × 0.62 × 0.14	黒褐色土（10YR 3/2）	弥・土	SK004 を切る
004	C－3･4	不整形	レンズ状	0.83 ×—× 0.08	灰褐色土（7.5YR 4/2）	弥・土	SK003 に切られる
005	B－2	不整楕円形	レンズ状	0.84 × 0.58 × 0.06	褐色土（7.5YR 4/3）	土	

表 2-1　柱穴一覧

柱穴（ＳＰ）	地　区	平面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備考
007	C－5	円形	0.38 × 0.38 × 00.8	黒褐色土（10YR 3/2）	弥	
008	C－4	円形	0.28 × 0.28 × 0.05	褐色土（7.5YR 4/3）	—	
009	B－4	円形	0.35 × 0.35 × 0.07	黒褐色土（10YR 3/2）	—	
010	B･C－3･4	円形	0.39 × 0.39 × 0.08	灰褐色土（7.5YR 4/2）	—	
011	C－3	不整形	0.42 × 0.30 × 0.17	黒褐色土（10YR 3/2）	—	SP012 を切る
012	C－3	円形	0.39 × 0.39 × 0.14	黒褐色土（7.5YR 3/2） 褐色土（7.5YR 4/3）	弥	SP011 に切られる
013	B･C－3	楕円形	0.64 × 0.50 × 0.11	灰褐色土（7.5YR 4/2）	弥	
014	C－3	円形	0.23 × 0.23 × 0.04	灰褐色土（7.5YR 4/2）	—	
015	C－3	楕円形	0.26 × 0.19 × 0.18	黒褐色土（10YR 3/2）	—	

表 2-2　柱穴一覧

柱穴（ＳＰ）	地　区	平面形	規　模 長径×短径×深さ（m）	埋　土	出土遺物	備考
016	C－3	円形	0.40 × 0.40 × 0.17	黒褐色土（10YR 3/2）	―	
017	B－2	不整円形	0.24 × 0.24 × 0.07	褐色土（7.5YR 4/3）	弥	
018	B－2	円形	0.16 × 0.16 × 0.09	褐色土（7.5YR 4/3）	―	
019	B－2	円形	0.25 × 0.25 × 0.05	褐色土（7.5YR 4/3）	弥	
020	B－2	円形	0.23 × 0.23 × 0.08	灰褐色土（7.5YR 4/2）	―	
021	C－1･2	不整形	0.56 ×（0.52）× 0.20	灰褐色土（7.5YR 4/2） 黒褐色土（10YR 3/2）	弥	調査区西壁トレンチに切られる
022	B－3	楕円形	0.48 × 0.32 × 0.51	褐灰色粘質土（7.5YR 4/1）	―	

表３　その他の出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考
				外　面	内　面			
1	壺	口径　[40.0] 器高　（1.5）	口縁部端面に２条の凹線文	マメツ	マメツ	橙・褐灰色 橙・褐灰色	石・長（1 ～ 3） ○	
2	壺	器高　（3.2）	口縁部は大きく外反する 端面に、凹線２条	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1 ～ 4） ◎	
3	壺	器高　（3.1） 底径　[5.9]	体部は、外傾して立ち上がる 底部は平底	ナデ	ナデ	黄灰色 橙色	石・長（1） ◎	
4	甕	器高　（5.4） 底径　[8.2]	体部は外傾して立ち上がる 底部は外に張り出し、上げ底	ヘラケズリ 指頭痕	ヘラケズリ	にぶい橙色 褐灰色	石・長（1 ～ 3） ○	
5	甕	器高　（7.5） 底径　5.4	体部は外傾して立ち上がる 底部は平底	ナデ 指頭痕	指ナデ 指頭痕	浅黄橙・黒褐色 にぶい黄橙色	石・長（1 ～ 5） ◎	
6	高坏	口径　[24.0] 器高　（5.7） 孔径　[2.0]	坏部上半は外反して立ち上がり、 下半は皿状である	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1 ～ 4） ○	
7	高坏	器高　（3.9） 裾径　[20.2]	裾部は「ハ」状に開いて据わる	ミガキの可能性	ナデ	橙・褐灰色 明褐灰色	石・長（1 ～ 3） ◎	
8	甕	口径　15.0 器高　（14.9）	口縁部は外傾して立ち上がる 頸部は「く」字に屈曲する 長胴形の体部最大径は上半にある	ハケメ	マメツ	黄橙・明黄褐色 明黄褐色	石・長（1 ～ 4） ○	
9	甕	口径　[21.8] 器高　（21.0）	口縁部は外傾して立ち上がる 頸部は「く」字に屈曲する 体部は長胴形	ナデ ハケメ	ナデ 指頭痕	橙色 にぶい黄橙色	石･長（1 ～ 1.5） ○	
10	甕	口径　[24.2] 器高　（20.9）	口縁部は外反ぎみに立ち上がる 頸部屈曲は緩やかな「く」字状 体部は長胴形	ハケメ	ハケメ	橙色 橙色	石・長（1 ～ 3） ○	
11	甕	口径　[21.4] 器高　（6.0）	口縁部は外傾して立ち上がる 頸部は「く」字に屈曲する 体部上端に刺突文	ナデ	マメツ	にぶい赤褐色 橙色	石・長（1 ～ 4） ○	
12	甕	器高　（4.2）	口縁部は外反ぎみに立ち上がる 頸部は「く」字に屈曲する	ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長（1 ～ 1.5） ○	

表３　その他の出土遺物観察表　（土製品）

番号	器種	法量（cm）	形　態・施　文	調　整		色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備考
				外　面	内　面			
13	甕	器高　（5.2）	口縁部は大きく外反する 端部に面を持つ	ヨコナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎	
14	甕	器高　（5.7）	口縁部は外傾して立ち上がる	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～4） ○	
15	甕	口径　[28.4] 器高　（3.9）	口縁部は外反して立ち上がる	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～3） ○	
16	甕	口径　[14.3] 器高　（20.6） 底径　　1.9	口縁部は外反して立ち上がる 体部はタマゴ形である	ナデ タタキ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎	
17	甕	口径　[14.2] 器高　（3.1）	口縁部は大きく外傾する 端部に面を持つ	ナデ ハケメ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎	
18	壺	器高（12.9）	体部は卵形 底部は丸底	タタキ ナデ	ハケメ 指ナデ	灰黄褐色 褐灰色	石・長（1～3） ○	

表４　その他の出土遺物観察表　（石製品）

番号	器種	残 存	材 質	法　量				備 考
				幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
19	石庖丁	ほぼ完形	結晶片岩	9.5	4.6	0.7	44.50	両端打抉
20	石庖丁	ほぼ完形	結晶片岩	8.2	5.6	0.6	49.47	穿孔２口
21	石錘	完形	砂岩	3.4	2.6	2.4	27.60	

第４章　調査の成果

本遺跡は第１章でも触れたとおり、松山市埋蔵文化財包蔵地『№134　浮穴小学校遺物包含地』内に立地する。重信川右岸で内川とに挟まれた標高約 36m の沖積地にあり、本包蔵地周辺から東に延びる緩斜面上に位置する。

前述のとおり、今回の調査では土坑と小穴を検出しているが、検出数が少なく、遺物の出土もほとんどないことから、個々の遺構や本遺跡の性格を詳らかにするには至らなかった。

本文中で触れたとおり、基本的な地形としては申請地南部に弥生時代後期から終末ないしは古墳時代初頭にかけての遺物を含む 11 及び 12 層が展開することが分かっている。その中で調査区北東部では 11 層が溝状に落ち込むラインが南東から北西に延びていたり、南西部では 12 層よりもさらに下部に堆積する 15 層（礫層）が露頭している。これは調査区の表土掘削をほぼ水平に行ったためであり、それをもとに旧期の地形を想定すると、かなり変化に富んだものであったことが分かる。

今回の調査で出土した遺物は、11・12 層からのものが大半で、弥生時代後期ら古墳時代初頭のものである。周辺では前述したように約 100m 西の浮穴小学校構内遺跡から概ね当該期の遺物が出土しており、関連をうかがうことができる。

遺跡周辺をもう少し広く望むと、前述したとおり内川、悪社川の北側から小野川、堀越川に向かって遺跡の密度が高くなり、さらに高縄山地南麓までその傾向は続いている。その中でも松山平野内で主要な位置を占めるいくつかの前方後円墳の他、7 世紀代の久米官衙遺跡群や来住廃寺といった歴史的に重要な遺跡も築かれている。

重信川より北側で見ると、上記のような多くの遺跡群、重要な遺跡群の南端に本遺跡があり、重信川に面しているといってもよい位置である。ただ、この近辺における発掘調査は浮穴小学校構内遺跡が唯一と言ってよく、まだまだ不明なことが多い。周辺には集落遺跡をはじめとして多くの遺跡が展開していることも想定でき、今後の資料増加を期待したい。

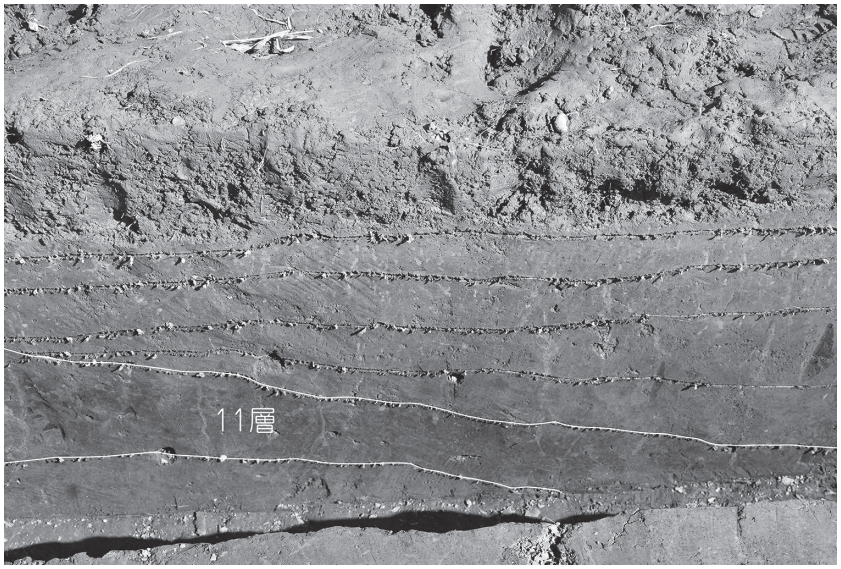
写真図版

1. 調査区完掘全景（西より）

2. 調査区完掘全景（俯瞰）

図版 2

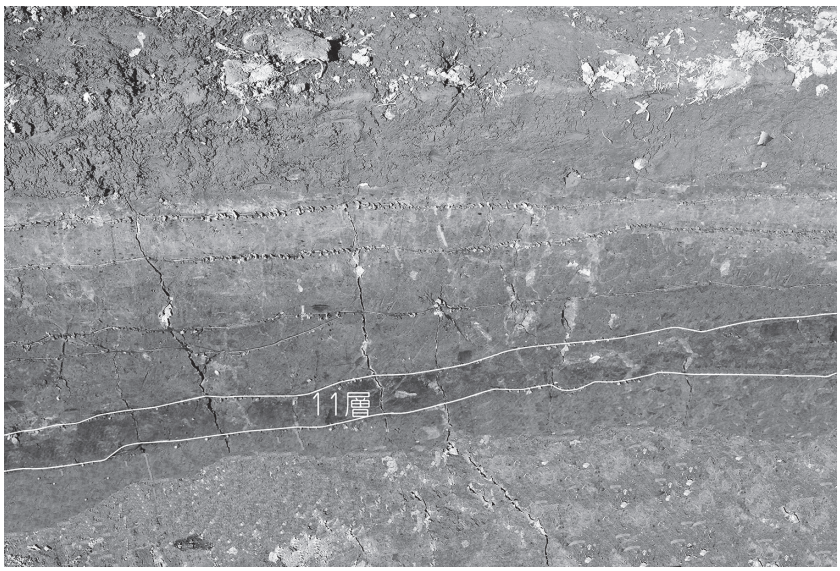
1. 調査区東壁土層断面全景
（西より）



2. 調査区東壁土層断面 11 層
北側立ち上がり（西より）

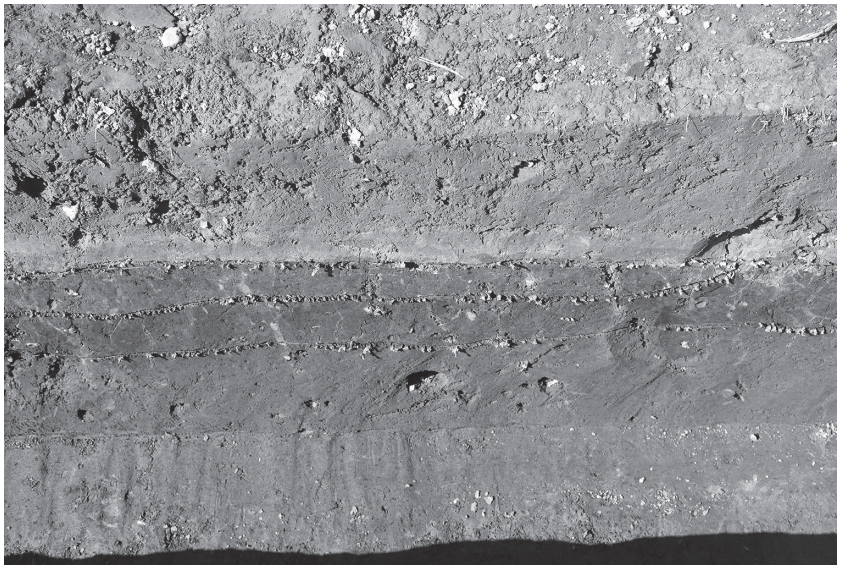
3. 調査区東壁土層断面 11 層
南側立ち上がり（西より）

1. 調査区北側土層断面全景
（南西より）



2. 調査区北側土層断面 11 層
北東側立ち上がり（南より）

3. 調査区西壁土層断面全景
（東より）



1. 調査区西壁土層断面
北西部 11 層掘り下げ付近
（東より）

2. 調査区南壁土層断面東端
（北より）

3. 調査区南壁土層断面
礫層東端検出状況
（北より）

1. 調査区南壁土層断面礫層（北より）

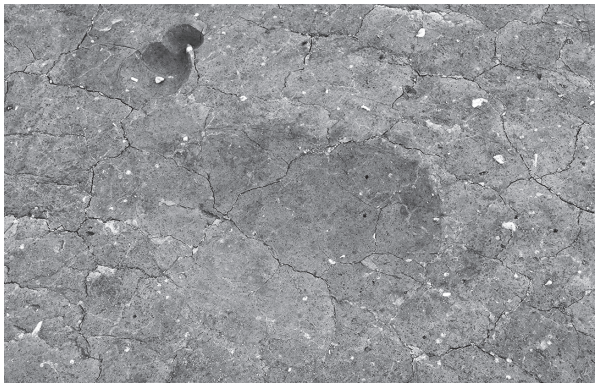
2. 調査区南壁土層断面西端検出状況（北より）

3. 調査区北東部 11 層検出状況（南東より）

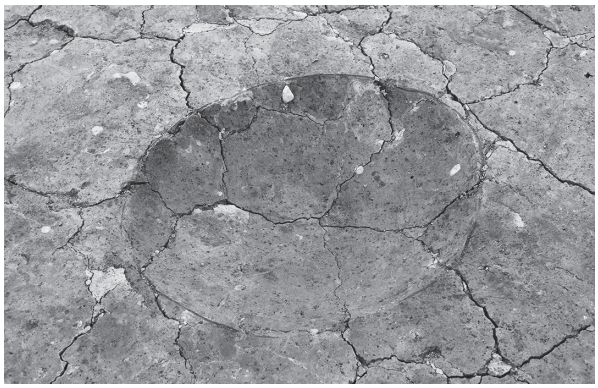
1. SK001 完掘（南より）

2. SK002 完掘（南より）

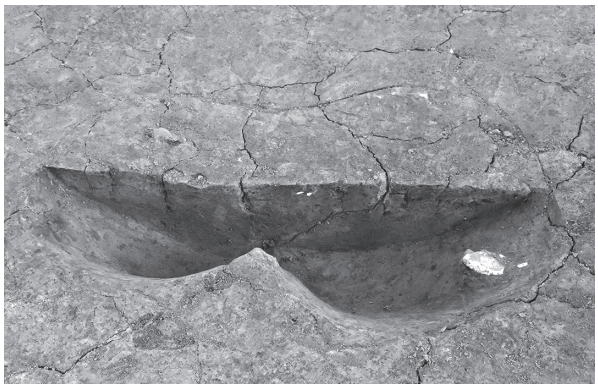
3. SK003・004、SP008 完掘（南より）



4. SK005、SP019 完掘（北西より）

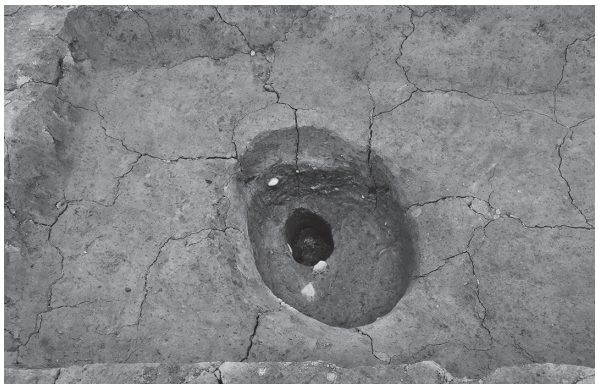


5. SP009 完掘（西より）



6. SP011・012 上層断面（西より）

7. SP021 完掘（西より）



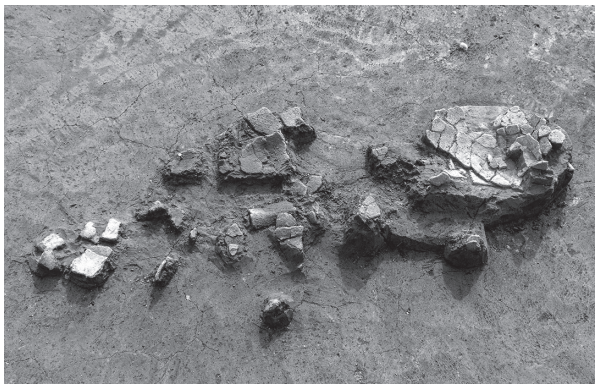
8. SP022 完掘（北より）

1. 調査区北西部遺物出土状況（東より）

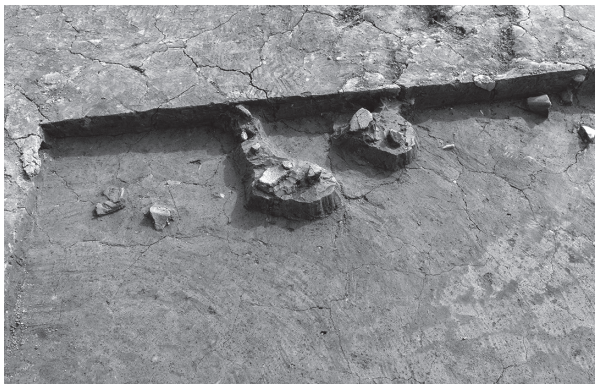
2. 調査区北西部遺物出土状況（西より）

3. 調査区北西部遺物出土状況（南より）

4. 調査区北西部遺物出土状況（北より）

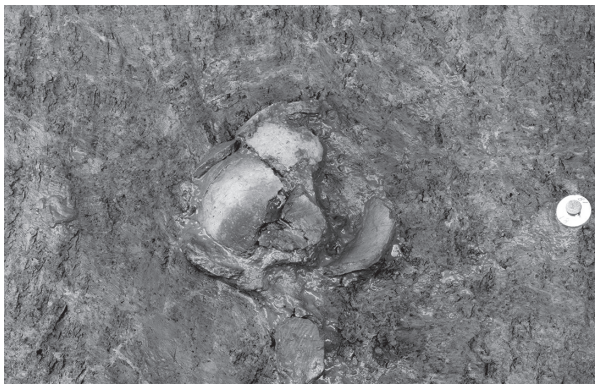


5. 調査区北西部遺物出土状況（北東より）



6. 調査区北西部遺物出土状況（北より）

7. 調査区北西部遺物出土状況（東より）



8. 調査区東壁際遺物出土状況（西より）

1. 北トレンチ石庖丁出土状況（南より）

2. 石庖丁出土状況（西より）

3. 調査風景（西より）

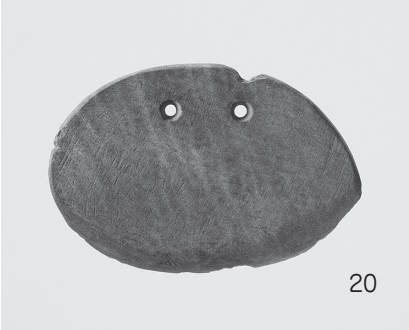
4. 遺構掘削状況（南より）

5. 調査区北西部 11 層掘削状況（東より）

6. 調査区北西部 11 層掘削状況（南西より）

7. 調査区上層断面測量状況（西より）

8. 遺構測量状況（西より）



1．出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	みなみたかいいっちょうじいせき
書名	南高井一丁地遺跡
副書名	浮穴保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第203集
編著者名	作田一耕
編集機関	公益財団法人　松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒791－8032　愛媛県松山市南斎院町乙67番地6　TEL 089－923－6363
発行年月日	西暦2021（令和3）年12月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
南高井（みなみたかい） 一丁地（いっちょうじ）遺跡	松山市（まつやまし） 南高井町（みなみたかいちょう）	38201	661	33°47′ 32.08″	132°47′ 59.14″	20200213 ～20200313	160㎡	浮穴保育園 新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南高井（みなみたかい） 一丁地（いっちょうじ）遺跡	散布地	弥生～古墳	土坑・小穴	弥生土器・土師器・石器	弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構及び遺物包含層を調査

要　約

南高井一丁地遺跡は松山平野南部を西流する重信川とその北側を並流する内川の間の氾濫原にあり、重信川までは約500mの位置に立地している。この付近は重信川自体が時代によって流路を変え、他の小河川とともに氾濫原を形成していることから、遺跡分布の薄いのが特徴となっている。

西方約250mには、本調査地を含めた『№134　浮穴小学校遺物包含地』の名称にもなっている、「浮穴小学校構内遺跡」がある。ここからは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器棺墓や溝、古墳時代中期の竪穴建物跡などが見つかっている。本調査地では時期が特定できる遺構は検出できなかったが、遺物包含層からは弥生時代後期を中心とした土器（壺・甕・高坏）や石器（石包丁）が出土しており、浮穴小学校構内遺跡との関連をうかがうことができる。このことから遺跡の中心は浮穴小学校付近にあり、本調査地はその縁辺部にあたることが推定できる。

既往の調査と今回の調査成果だけで本遺跡の全体像を明らかにするのは難しいが、今回の調査は、内川の北側に展開する遺跡群の南限で、かつ重信川に面する遺跡として位置づけることができる資料である。

松山市文化財調査報告書　　第203集

浮穴保育園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

南高井一丁地遺跡

令和3年12月24日　発行

編　集　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
発・行　埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー
〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923－6363

印　刷　佐川印刷株式会社
〒791－8018　松山市問屋町6番21号
TEL（089）925－7471